

変貌するコメの国際市場

タイの輸出構造との関連を中心に

主任研究員 室屋有宏

〔要 旨〕

- 1 90年代以降、タイ、ベトナムを世界の2大輸出国とするコメの国際市場が形成され、貿易量が大きく伸びた。価格も90年代半ば以降に下落したことで途上国の輸入需要を高める循環を生んだ。コメの輸入地域では、アジアの割合が趨勢的に低下し、アフリカ、北米等の割合が上昇した。
- 2 こうした市場構造のなかで、タイはアフリカ、中東向けにはパーボイルド米を、またアメリカ等には香り米輸出を伸ばすことで競争力を確保した。一方、ベトナムは中・低品質の白米を主に政府間契約で東南アジア向けに輸出し、両国の間には一定の分業関係が形成された。
- 3 タイが長期にわたりコメの最大輸出国の座を確保している主な要因として、恵まれた農地条件、農民の低い賃金水準、民間主体の取引、があげられる。
- 4 しかし、近年、実質的な価格支持政策である「籾担保融資制度」が大規模に導入され、特に昨年来、市場実勢を超える価格支持が行われることで、コメ価格の高止まりやタイのコメ輸出を支えてきた柔軟性、弾力性の低下が懸念されている。
- 5 籾担保融資制度には、政府の財政負担が大きい、不正の余地が多い、利用が大規模農家に偏っている、との根強い批判がある。
- 6 コメの国際市場は、90年代以降の「安価で安定的」にみえた構造が反転し、再び「薄くて、限界的で、変動の激しい」市場へと回帰する兆しが、昨年来、現われている。市場本位の国際市場の発展は、零細農の貧困を土台とする構造があり、本来的に不安定で持続可能なものではない。農民が安心してコメ作りができる経済社会を構築するためには、地域、政府、多国間での協調・協力体制を進めることが不可欠である。

目次

はじめに

1 コメの国際市場とタイ、ベトナムの位置づけ

- (1) 歴史的な変遷
- (2) 90年代以降の変化
- (3) 市場のセグメント化

2 タイのコメ輸出メカニズム

- (1) タイのコメ輸出の特質
- (2) 農家経済の状況と地域的格差

3 タイのコメ政策と価格決定メカニズムの変化

- (1) 勅担保融資制度の変質
- (2) 支持価格の大幅引上げ
- (3) 輸出価格形成の変化
- (4) 農民の反応と制度改革に向けた動き

まとめ

変貌する市場構造と

「競争から協調」に向けた動き

はじめに

タイは世界最大のコメ輸出国であり、ベトナムと合わせると1,500万トン近いコメを輸出し、世界シェアのおよそ半分を占める。コメの国際的需給を考える場合、両国の今後の輸出力をどうみることが決定的に重要なのはいうまでもないだろう。

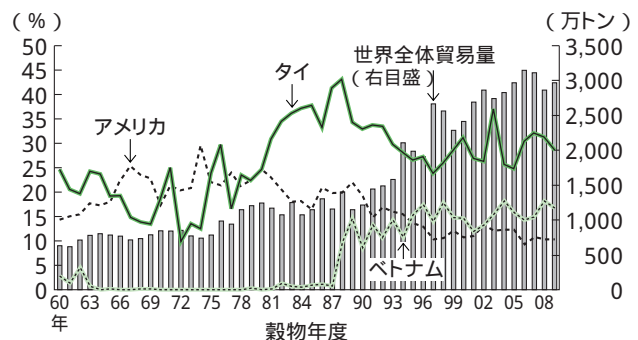
本稿は、1990年代以降のコメの国際市場をまず概観したうえで、タイの輸出構造の特質についてベトナムとの比較をしつつ整理を行いたい。そのうえで、昨年来以降の激しい価格変動と市場環境の変化のなかで、タイの流通・輸出メカニズムは相当大きな変質を余儀なくされており、今後、コメの国際市場の構造的変化につながる可能性があることを示したい。

1 コメの国際市場とタイ、ベトナムの位置づけ

(1) 歴史的な変遷

タイは戦後ほぼ一貫して世界最大のコメ輸出国の地位にあるが、そのシェアが大きく伸びるのは80年代以降である。60年代においては、アメリカが国内余剰農産物を食糧援助計画に利用する公法480を活用し輸出を大幅に伸ばし、60年代末にはタイを抑えて世界最大の輸出国となった(第1図)。70年代はタイとアメリカが首位の座を争う状態が続いたが、80年代に入るとコメを含

第1図 タイ、ベトナム、アメリカのコメ輸出市場におけるシェア



資料 USDA P&SDより作成

め穀物市場の過剰基調と価格下落が強まるなか、タイは低価格を武器にシェアを大きく高めた。

さらに90年代になると、ベトナムが輸出市場に参入し、アメリカに取って代わる形で世界2位の座についた。しかし、アメリカはその後も3ないし4位の地位を依然として維持しており、主要輸出国の一角を占めている。輸出市場で劣勢に立つアメリカは、輸出補助金に相当するマーケティング・ローンを導入し、国際価格が国内支持価格を下回った時は、その差額を政府が生産者に補てんする政策により輸出の絶対量を維持している。

(2) 90年代以降の変化

コメは小麦・トウモロコシとともに世界の3大穀物のひとつだが、小麦・トウモロコシと比較してその国際市場は「薄く、限界的で、変動が激しい」と評価されている。「薄い」というのは、生産量に対して貿易量が小さいということであり、「限界的」というのは各国において国内自給が中心で輸出入が行われるのは豊作か不作時のみという意味である。こうした特性から、貿易量の変動が大きく、またそれを増幅する形でコメの国際価格は大きな変動が発生しやすい。

しかし、タイ、ベトナムが輸出の中心国となる90年代に入ると、コメの国際市場規模は急速に拡大し、その傾向は

2000年代にさらに強まった。生産量に対する輸出数量の割合（貿易率）が90年代以降に大きく伸び、70～80年代までの「コメの生産量伸び率＝貿易量の伸び率」という関係は、90年代以降に「生産量の伸び率＜貿易量の伸び率」へと転換した（第1表）。

アジアにおいては70～80年代を通じ、高収量品種の導入による「緑の革命」の成果が浸透し、単収の大幅上昇による生産量の拡大が続き、これに加えベトナム、中国では市場経済化に伴う農民の増産意欲の高まりもあって、アジア全体でコメ生産量は大きく伸びた。これを主因にアジアにおける輸出余力が増大し、90年代にはベトナム、インドといった新興のコメ輸出国が台頭した。

こうした変化は、輸入国にとってはコメの国際市場に対する信頼性を高め、輸入依存を強める効果があった。価格の面でも90年代後半以降、低下傾向（実質的、名目的とも）が強まり（第2図）、その間の貿易自由化等も手伝って、「安価な食糧」を求める途上国のニーズを顕在化させ市場を循環的に拡大させた。

第1表 主要穀物の世界生産量、貿易量、貿易率の変化

(単位 千トン、%)

		60年代	70	80	90	00
トウモロコシ	生産量	230,734	338,681	436,446	544,302	691,181
	貿易量	24,245	50,883	64,603	65,072	81,475
	貿易率	10.5	15.0	14.8	12.0	11.8
小麦	生産量	267,528	371,075	489,238	568,065	607,814
	貿易量	52,927	66,484	98,875	105,101	113,250
	貿易率	19.8	17.9	20.2	18.5	18.6
コメ(精米)	生産量	173,967	233,965	308,315	371,867	413,753
	貿易量	7,348	9,115	11,974	19,239	28,603
	貿易率	4.2	3.9	3.9	5.2	6.9

資料 USDA P&SDより作成
(注) 00年代には09/10年の予測値を含む。

しかし、2000年代に入ると、国際市場の拡大基調は続く一方で生産伸び率は鈍化し、在庫水準も傾向的に低下した。コメの国際価格は、00年には200ドルを下回る歴史的な低さまで下落したが、その後はこうした需給基調の変化を反映して上昇に転じ、07年末には360ドル、08年に入ると各国での輸出規制や投機的な動き等から急騰し、4月には900ドルを超えた。

90年代以降のコメの国際市場の変化を貿易フローからみると、伝統的な輸入地域で

あったアジアのシェアが趨勢的に低下し、代わってアフリカ、北米、中米、カリブ海諸国の比率が上昇し、輸入国数の増加と地理的拡散をもたらした（第2表）。

他方、輸出国は、タイ、ベトナム、アメリカ、インド、パキスタンの5ヶ国で約75%のシェアを占め、特定国に集中している。輸出上位5ヶ国のシェアは構成国の入れ替わりがあるものの、60年代からほぼ一貫して75%前後にあるのは興味深い。

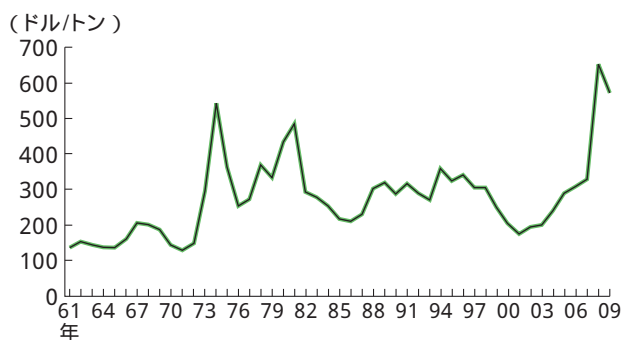
（3）市場のセグメント化

90年代以降の国際市場の大きな変化として、特定の種類のコメが特定の国との間で取引されるという市場のセグメント化の進行が挙げられる。

コメは単一の穀物ではなく、種類と品質に対する消費者の嗜好が明確に分かれており、他との代替性が小さいという特性がある。^{（注1）}市場で取引されるコメの種類は、大別すればインディカ（長粒種）、ジャポニカ（中粒種）、香り米（ジャスミン・ライス）、パーボイルド米（蒸し米）、もち米の5つあり、それぞれに品質、特に碎米比率、また加工の違い（粳、玄米、精米）等が加わ^{（注2）}る。このうち日本人には余り馴染みがないが、国際市場での取引が近年伸びているのが、香り米とパーボイルド米で、それぞれ別個の市場を形成している。

08年のタイの輸出をみると、1,001万トンの輸出量全体のうち香り米が250万トン（割合25%）、パーボイルド米275万トン（27%）、白米430万トン（43%）、その他

第2図 コメ国際価格の長期的推移
（タイ碎米5%、FOB・年平均価格）



資料 IRRI, 世銀データより作成
（注）09年は1～6月平均。

第2表 コメ輸入の地域別構成の変化

	(単位 %)				
	60年代	70	80	90	00
東アジア	13.2	9.3	9.4	9.6	7.9
南アジア	19.2	9.1	6.8	5.5	4.3
東南アジア	30.3	31.6	11.3	18.4	16.9
中東	4.8	12.5	21.2	19.6	18.5
北アフリカ	0.2	0.6	0.9	1.0	1.0
サハラ以南アフリカ	9.2	14.4	25.3	19.8	28.0
EU	12.0	10.2	8.3	5.4	4.7
その他欧州	0.8	0.5	0.6	0.4	0.4
旧ソ連12ヶ国	4.0	4.3	4.7	2.3	1.8
北米	0.8	1.2	2.4	4.4	5.4
カリブ海諸国	3.9	3.5	2.8	3.7	3.8
中米	0.3	0.2	0.4	1.1	1.8
南米	1.0	2.0	4.7	7.6	4.2
オセアニア	0.3	0.7	1.2	1.3	1.2

資料 第1図に同じ

(もち米が中心) 45万トン(5%)となっている。輸出のうち価格水準の高い香り米とパーボイルド米が半分強を占め、また特定の輸出先とリンクしている。

タイの最大輸出地域はアフリカで、国別では特にナイジェリア・ベニン^(注3)、南アフリカ向けが大きなシェアを占めているが、こうした国への輸出はほぼ全量パーボイルド米である(第3表)。パーボイルド米は、籾を水に浸した後、蒸気で蒸し乾燥・精米

させたコメで、保存性や栄養価に優れている。もともとインドなど南アジアで消費されていたが、現在は中東、アフリカで広く利用されている。

タイのパーボイルド米輸出は、昨年インドが高級香り米のバスマティ米以外のコメ輸出を停止させたことでいちだんと拡大した。インドはパーボイルド米の最大の輸出国であったが、この供給が止まったことでタイは「特需」を享受する形になった。

もうひとつタイの輸出を牽引している香り米は、中国系住民を中心に人気が高く、世界的に需要が高まっている。08年の香り米の輸出先では、アメリカが最大で、次いでコートジボアール、セネガル、香港、中国、マレーシア、シンガポールの順である。

次にベトナムの輸出先をみると、アジアのシェアが6割近くに達し、しかもフィリピン、マレーシア向けが際立って高い。またキューバ向けが1割近く占めるなど、タイの輸出先構成と大きく異なっている(第4表)。輸出されているコメの

第3表 タイのコメ輸出先の変化

(単位 トン, %)

	05年	06	07	08	05年 シェア	08年 シェア
アジア	2,057,800	2,069,285	2,890,639	2,473,681	28.2	24.7
中国	490,134	653,153	462,152	249,483	6.7	2.5
日本	220,328	131,851	145,218	213,291	3.0	2.1
フィリピン	77,785	111,925	425,506	599,677	1.1	6.0
マレーシア	417,381	372,814	414,028	531,470	5.7	5.3
シンガポール	172,916	180,069	217,120	238,763	2.4	2.4
インドネシア	119,792	171,740	456,158	111,061	1.6	1.1
香港	303,262	281,854	313,843	299,333	4.2	3.0
中東	906,178	1,577,274	1,465,148	1,354,416	12.4	13.5
サウジアラビア	52,620	52,140	76,919	132,285	0.7	1.3
イラク	463,195	616,923	413,436	494,653	6.3	4.9
イラン	160,481	650,697	615,904	153,596	2.2	1.5
オマーン	165	254	6,166	101,215	0.0	1.0
欧州	332,282	404,469	646,961	791,969	4.5	7.9
EU-27	227,558	300,448	386,184	443,547	3.1	4.4
オランダ	33,351	39,849	96,389	154,761	0.5	1.5
ベルギー	28,104	59,824	82,561	100,956	0.4	1.0
ロシア	55,083	43,056	100,577	132,943	0.8	1.3
アフリカ	3,450,533	2,736,271	3,922,286	4,640,393	47.2	46.4
ガーナ	108,116	114,854	224,771	209,708	1.5	2.1
カメルーン	376,362	117,575	151,547	146,862	5.2	1.5
セネガル	494,649	319,196	680,155	477,850	6.8	4.8
トーゴ	118,764	38,107	154,586	215,770	1.6	2.2
ナイジェリア	601,969	384,340	327,025	844,322	8.2	8.4
ベニン	526,333	536,248	801,498	703,795	7.2	7.0
アンゴラ	20,885	35,144	150,686	169,036	0.3	1.7
南アフリカ	455,083	441,380	532,369	546,745	6.2	5.5
コートジボアール	298,301	451,004	397,569	527,384	4.1	5.3
北米・中米	414,293	483,163	477,008	552,563	5.7	5.5
米国	346,020	379,506	372,802	403,813	4.7	4.0
オセアニア	143,261	150,193	155,339	198,013	2.0	2.0
オーストラリア	78,107	71,970	83,358	115,637	1.1	1.2
合計	7,304,346	7,420,656	9,557,382	10,011,035	100.0	100.0

資料 Thai Rice Exporter's Association ホームページより作成

第4表 ベトナムのコメ輸出先の変化

(単位 千トン, %)

	99年	00	01	02	06	08	06年 シェア	08年 シェア
アジア	2,841	2,085	1,891	2,185	2,777	2,684	59.0	57.7
インドネシア	1,379	430	532	741	309	143	6.6	3.1
イラン	111	-	-	15	162	60	3.4	1.3
イラク	453	685	536	872	24	194	0.5	4.2
マレーシア	142	192	153	144	479	382	10.2	8.2
日本	15	50	11	5	134	11	2.8	0.2
フィリピン	502	607	556	286	1,526	1,730	32.4	37.2
シンガポール	84	61	58	15	479	34	10.2	0.7
アフリカ	1,161	851	852	304	1,346	1,266	28.6	27.2
ヨーロッパ・CIS	171	146	237	139	110	124	2.3	2.7
南北アメリカ	195	173	287	277	434	505	9.2	10.9
キューバ	195	167	287	276	420	491	8.9	10.6
その他・不明	232	115	262	341	38	74	0.8	1.6
合計	4,600	3,370	3,528	3,245	4,705	4,652	100.0	100.0

資料 USDA GAIN Report 各年より作成
 (注) 99～02年は小澤(2004b)

種類においても、香り米が10万トン弱ある以外は、白米がほとんどである(08年)。しかも、白米のうち25%砕米が217万トン(割合47%)と最も多く、次いで5%砕米が166万トン(36%)、15%砕米が49万トン(11%)と、中・低品質米の割合が非常に高い(注4)。これに対して、タイの場合、白米の輸出ウエイトそのものが小さく、また品質の面でも100%白米が8%、5%砕米が23%、砕米10%超が12%とベトナムに比べ高品質米の比重が大きい。

こうした両国の輸出の違いは、タイの輸出は民間ベースがほとんどなのに対して、ベトナムは途上国向け政府間取引(国際入札)が過半を占めるという取引形態の違いとも関連している。

このようにタイとベトナムは輸出市場で激しく競争しあう一方、輸出先とコメの種類をベースに一定の分業・補完関係が存在しているといえる。こうした関係は、90

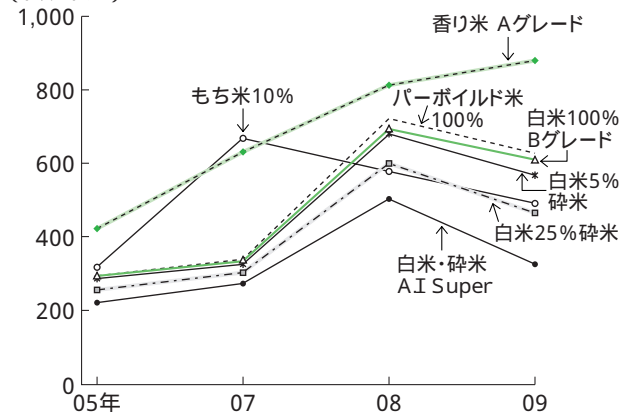
年代以降、ベトナムが新興輸出国として政府間取引を主体にローエンドの市場を獲得していったのに対して、タイは高付加価値化と新規市場の開拓に民間主体で取り組むことで輸出競争力の維持を図ってきた結果でもある。

コメの国際価格は昨年5月をピークに急落し、今年に入っても下落基調が続いているが、コメの種類による価格推移に大きな格差がみられる。

タイの輸出価格でみると、香り米は今年(1～5月平均)に入っても昨年平均を上回っており、またパーボイルド米も高値水準を保っているのに対し、ベトナム等との競争が激しい白米、特に低品質米ほど下落幅が大きい(第3図)。

(注1) 他の穀物でもこうした面があるが、コメほど多様ではない。現在、国際市場で価格付けされているコメの種類だけでも50以上ある

第3図 タイの種類別コメ輸出価格(FOB年平均)の推移(ドル/トン)



資料 Board of Trade of Thailandより作成
 (注)1 FOB価格にはパッケージ代は含まず。
 2 09年は1～5月平均。

(Concepcion2004)。コメは標準化が困難であることが、世界的に確立されたコメの先物市場が存在しない大きな要因でもある。

(注2) 長粒種・短粒種で分類すれば、香り米、パーボイルド米、もち米ともに長粒種に属する。

(注3) ベニンはナイジェリアの隣国に位置し人口約840万人の国である。ベニンのコメ輸入は自国消費用ではなくナイジェリア向けが中心であり、USDA統計ではベニンの輸入をナイジェリアに一括している。

(注4) 砕米は精米の過程などで出る細かく砕けてしまった米粒で、この混入比率が高いほど低級なコメとして扱われる。例えば、「5%砕米」は砕米の混入率が5%未満の意。

(注5) ジャポニカ種の国際価格の動きは長粒種と対照的に、今年1~5月で前年比75%も上昇している。その主な理由として、カリフォルニアの水問題、エジプトの輸出規制継続、オーストラリアの不作等、輸出向け主産地での供給懸念がある(FAO)。なお、ベトナムには輸出向けジャポニカ生産を行う日系企業が2社進出し、少量だが輸出の実績がある。

2 タイのコメ輸出メカニズム

(1) タイのコメ輸出の特質

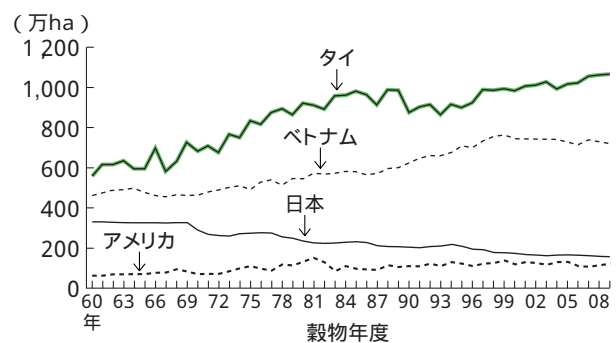
タイのコメ輸出が世界首位の座を長期間維持できたのは、端的には海外需要の変化に呼応し、柔軟かつ弾力的に対応できる国内の生産・流通構造が主因といえる。この構造を支える重要な条件としては、第一にアジアの国としては恵まれた農地条件、第二は農民の賃金水準が依然として低いこと、第三に流通・加工を含め民間取引が中心であること、が挙げられよう。こうした条件は、コメに限らずタイの農業が輸出産業として発展してきた基本的な要因ともなっている。

タイの国土面積は日本の約1.4倍だが、平野が多いため農地面積は1,860万haと日

本の約4倍の広さがあり、そのなかでコメは最も重要な作目であり、農地面積のおよそ半分を占めている。また、作付面積は戦後一貫して拡大ペースを維持しており、これに比例して生産量は60年代平均の720万トンから、2000年代には同1,800万トンへと飛躍的に増大した(第4,5図)。タイの場合、戦後、森林の大規模な破壊を伴いながら、キャッサバ、大豆、メイズ等の輸出向け新規畑作物の導入がコメの生産拡大と同時に進行したのが大きな特長でもある。

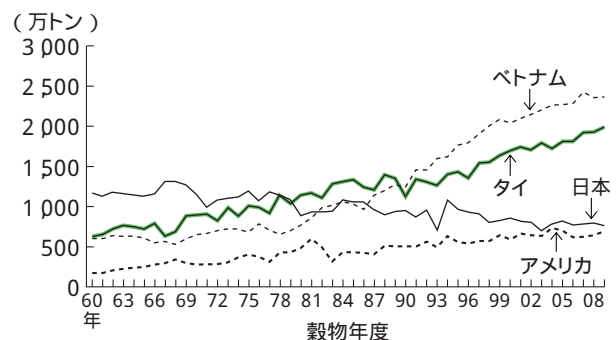
一方、タイのコメ生産は全国の灌漑比率が25%程度と低く、肥料・農薬などをほとんど使用しない低投入な栽培方法も広く行われている。これに対して、ベトナムでは

第4図 タイ、ベトナム、アメリカ、日本のコメ作付面積の推移



資料 第1図に同じ

第5図 タイ、ベトナム、アメリカ、日本のコメ生産量

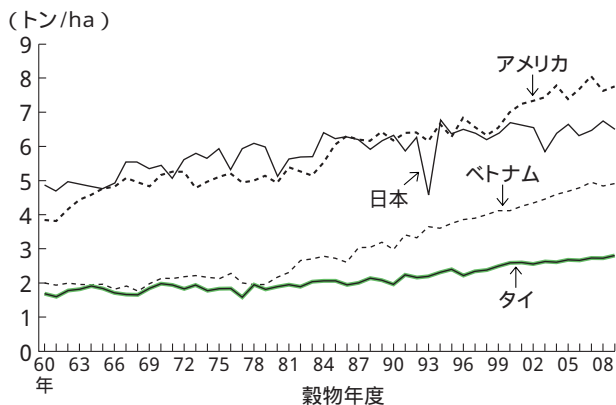


資料 第1図に同じ

作付面積が00年前後を境に減少に転じており、コメ生産量の伸びは肥料・農薬の多投入による単収の伸びに依存するようになっている。両国の単収推移は対照的で、粗放的なタイに対してベトナムは90年代以降の輸出拡大期に集約化が強まっている（第6図）。

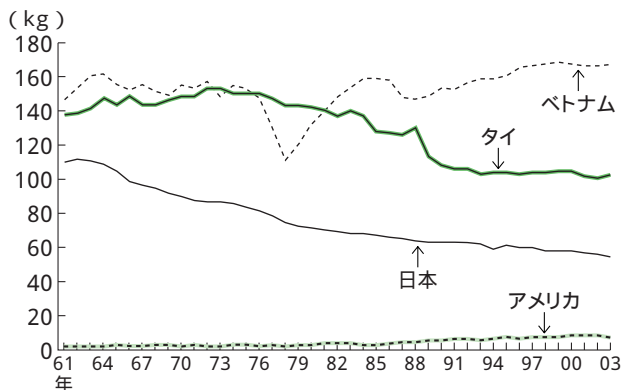
また、タイの輸出が本格的に伸びるのは80年代以降であるが、これは国内生産の増大に加えコメの劣等財化（所得が上昇すると需要が減る）による一人当たり消費量の減少と人口増加率の急速な鈍化が大きく影響している（第7図）。タイでも70年代ま

第6図 タイ、ベトナム、アメリカ、日本の単収推移（籾ベース）



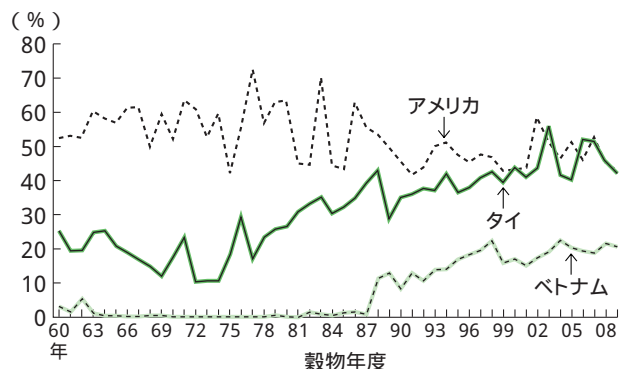
資料 第1図に同じ

第7図 1人当たりのコメ消費量の比較(精米ベース)



資料 FAOSTATより作成

第8図 タイ、ベトナム、アメリカのコメ輸出比率



資料 第1図に同じ

では、増大する国内消費を賄うという色彩が強く、輸出余力は限定的だった。これに対してベトナムは世界第2位の輸出国であっても、まだ国内消費分が8割程度を占め、輸出向けは生産の2割に過ぎない（第8図）。

(2) 農家経済の状況と地域的格差

タイのコメ輸出を支える優位条件として3つの要素（恵まれた農地条件、農民の低い賃金水準、民間主体の取引）を挙げたが、タイの場合、こうした条件が地域間での大きな格差を内包しており、このことが複雑な問題を生んでいる。

タイの地域は4つに区分されるが、この中でバンコクの後背地に位置しチャオプラヤー・デルタを擁する中央部が、最大のコメ生産地かつ輸出向け長粒種の主産地である。中央部は灌漑が普及しているため二期作が通常であり、一部では三期作が行われている。農家世帯当たりの平均農地面積は30.35ライ（約4.9ha、1ライ=0.16ha）とタイでは最大である（第5表）。また、中央部は非農業部門の雇用が発展しており、機械

第5表 タイの農家・農家経済概要(05/06年)

	農家世帯数 (万戸)	農業人口 (万人)	農地面積 (ha/戸)	灌漑利用の* 農家比率(%)
北部	133	365	3.5	34.0
東北部	269	809	3.6	20.7
中央部	88	271	4.9	47.0
南部	89	258	3.6	16.8
全国	578	1,702	3.7	26.3
農家年間経済	世帯純農業 利益(バーツ)	世帯農業外 収入(バーツ)	世帯農業外 支出(バーツ)	世帯純利益 (バーツ)
北部	32,094	57,629	74,759	14,964
東北部	15,341	63,507	62,081	16,767
中央部	73,429	86,424	104,749	55,104
南部	111,935	81,874	124,268	69,541
全国	42,445	68,256	80,510	30,191

資料 ジェトロ(2008)
原資料 農業経済局
(注) *は04/05年度

化, 農作業の受委託が広く浸透している。

これに対して, 東北部はタイ最大の農業人口を抱えるが, 天水依存度が高く, かつ土壌条件が悪いため二期作が困難で単収も低い。また年々の収量変動が激しいこと等から, タイの中で最も農業所得の低い地域である。ここでの稲作は, もち米の割合が高く, 自給的な性格が強いが, 他方で輸向け高級香り米の産地でもある。北部の稲作も東北部と似ているが, 中央部に近い地域では輸出用のコメ生産が行われている。南部はコメの自給ができていないが, 天然ゴム, パーム油, パイナップル, また沿海部ではエビ養殖などの商品作物の導入が進んでおり, 所得の面では最も高い地域である。

地域ごとの農家世帯の年間純農業収入をみると, 中央部でも約20万円(05年平均1バーツ=2.71円)に過ぎず, さらに東北部

は中央部の約1/5, 北部では約1/2と著しい格差がある。特に東北部は出稼ぎなどの農外収入への依存が圧倒的に大きく, しかも地域内での雇用機会が限られていることもあり, バンコクなどへ大量の出稼ぎ労働者を送り出している。

タイの人口は6,575万人(07年)で, 1人当たりのGDPは3,841ドル(07年), ASEANではシンガポール, マレーシアに次ぐ水準で, ベトナムの810ドル, 高成長を続ける中国の2,556ドルと比べても相当高い。マクロ経済の観点ではタイは中進国化しているが, 都市・農村の格差に加え(1人当たりのGDPで農業部門と非農業部門は10倍の格差がある(05年)), 地方間格差も非常に大きいという構造があり, このなかで依然として就業人口の4割近くを占める膨大な農民層の生活水準の改善が政治の焦点となっている。

3 タイのコメ政策と価格決定メカニズムの変化

(1) 初担保融資制度の変質

タイのコメ政策は歴史的にみると, 戦後55年から80年代前半までは, 政府はライス・プレミアムという輸出税を輸出米に課しており, ある程度プレーキを踏みながら, 国際市場でアメリカとの間でトップの座を競いあっていた。ライス・プレミアムは国内米価を国際価格より低く抑え, 非農業部門の成長を支援するとともに, 財政収入の確保をねらったものだった。

一方で、政府は75年以降、農民の所得改善を目的に、コメ価格の引上げを図る動きも講じてきた。当初は政府機関を通じて農民や精米所から籾を買い上げる方式を取ったが政府の損失が大きいため、政府系の農業・農業協同組合銀行(BAAC)に「籾担保融資制度」(paddy mortgage scheme)を実施させた。この制度は、農家または精米業者が籾米を担保に、政府(実際にはBAAC)から融資を受けるが、ローンの返済義務がないため実質的な価格支持となっている。

しかし、この制度の導入時は、価格支持というよりは輸出促進が主目的であり、支持水準も市場実勢ベースであった。^(注6)この制度は82年に始まったが、本格的に運用されたのは86年以降であり、同じく86年にはライス・プレミアムが廃止され、コメ政策は輸出促進へシフトした。

このようにタイのコメ政策は全体として

第6表 籾担保融資制度の動き(雨期作米対象分)

年度	参加農家数	買入数量 (トン)	買入金額 (千バーツ)
92	465 774	3 383 324	10 550 210
93	199 956	1 202 718	3 664 220
94	211 409	1 402 931	4 229 400
95	181 999	1 181 259	3 938 743
96	123 870	865 113	2 968 657
97	111 107	786 363	2 938 730
98	116 335	677 278	3 262 777
99	113 062	697 756	3 286 433
00	168 483	1 618 496	8 124 849
01	683 769	6 140 902	32 204 585
02	497 906	5 648 743	28 842 690
03	177 137	2 608 234	12 440 180
04	546 503	5 503 519	44 151 600
05	770 721	7 643 033	59 828 720
06	227 132	3 055 687	21 928 418
07	343 518	4 420 174	56 616 333
08	570 000	6 056 633	65 867 000

資料 USDA「GAIN Report(3/16/2009)」
 原資料 Bank for Agriculture and Agricultural
 Cooperatives(BAAC)
 (注) 08年度は09年3月15日現在。

は、80年半ばに「抑圧から自由化へ」と移行したといえるが、タクシン政権(01~06年)に入ると、農民層の広範な支持を獲得するために、担保融資制度の価格支持機能が強まり、かつ大規模化していった(第6表)。

(注6) 大内・佐伯(1995, p.120-121)は担保融資制度の導入時の目的について、「農家と精米業者が短期の低利融資を受けて収穫期に米を貯蔵し、端境期に米価が上昇したときに販売することを可能とし、理論的には米価の季節変動を緩和」とするとともに、「低利融資によって米の貯蔵費と流通経費が下がる結果、輸出促進効果がある」としている。

(2) 支持価格の大幅引上げ

06年6月、クーデタでタクシン政権が崩壊した後、タイの政治情勢は短期間に政権交代が相次ぐ非常に不安定な状態が続いている。これに加え、07~08年にかけて原油、資材価格の高騰が農民の不満を高め、08年のサムック政権以降、担保融資価格が市場実勢を超え政治的に引き上げられるようになった。

融資価格は籾米の種類、等級により異なるが、乾期作100%白米(籾・含水率15%)のトン当たり価格は、05年6,700バーツ、06年7,100バーツ、07年6,600バーツと推移してきたが、08年には14,000バーツへと一挙に引き上げられた。昨年の雨期作米では若干下がって12,000バーツとなったが、これに精米(歩留まり60%)、輸送、選別等のコストを加味したドル換算価格は650ドルに相当する。同等米の輸出価格は昨年末時点で550ドル前後であり、支持価格は内外で逆転する異常な状態となっている。

しかも、タイの輸出価格は同等のベトナム米420ドルと比べると100ドル以上高い。従来、タイとベトナムのコメではタイの方が10～15ドル程度高かったが、この差が一挙に拡大した。ベトナムだけでなく、従来はタイに比べ100ドル以上高かったアメリカ米と比べても、タイ米が17%高いという前例のない状態となった。こうした価格状態は今年に入っても続いており、6月第1週時点でタイは581ドル、アメリカが502ドル、ベトナム410ドルとなっている（第9図）。

タイのコメ価格形成を歪めているもうひとつの大きな要因が、パーボイルド米「特需」の持続である。当初予想されていたインドのバスマティ米以外の輸出再開が、国内の雨不足を理由に遅れていること、またパーボイルド米の主要マーケットであるアフリカおよび中近東諸国の需要が堅調であること、さらにベトナムがパーボイルド米の生産設備をほとんど保有していないといった要因がタイの輸出を押し上げている。パーボイルド米も原料米は通常の長粒種であるため、その調達圧力に連動して白米価

格も高止まる格好となっている。

こうした状況から、タイのコメ輸出は今年に入りパーボイルド米は引き続き好調なものの、白米はベトナムにシェアを奪われ大きく落ち込み、全体としては今年1～5月で前年比30%近い大幅減となっている。

FAOの08年6月の見通しでは、09年の輸出量はタイが1,001 830万トン、ベトナムが475 555万トン、他の主要輸出国ではインド370 400万トン、パキスタン329 405万、アメリカ329 310万トンと小幅な変動であり、全体としてタイの「一人負け」状態となっている。

今後インドがコメ輸出規制を解除した場合、タイの輸出は全体として数量、価格とも大きく落ち込むことは避けられず、一部にタイの輸出量がベトナムを下回ると予想する向きもある。^(注7)

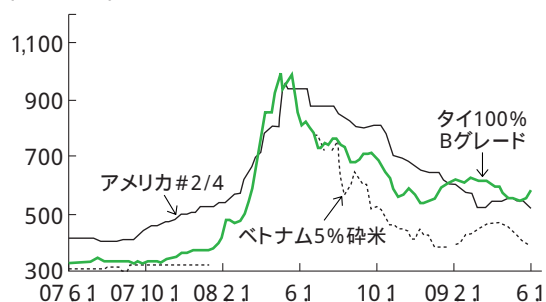
(注7) 日本経済新聞09年6月26日付

(3) 輸出価格形成の変化

現アピシット政権は「タクシンの政治」を否定して誕生したが、担保融資制度はむしろ拡充され存続している。不安定な政治社会の状況下で、政権の安定を求めるためには国民の大きな割合を占める農家の支持が不可欠であり、融資価格引下げや買入枠縮小という選択肢は容易に取れない情勢である。

アピシット政権下、08年乾期作コメを対象とする計画（09年3月16日～7月31日）の融資価格は11,800バーツ（粳・含水率15%）と雨期作並みの価格が維持され、これは市

第9図 タイと競合国(同等米)の価格推移
(ドル/トン)



出典 USDA "Grain: World Markets and Trade" 2009. June, p.10より筆者作成

場価格を2割ほど上回る水準である。また買入枠も昨年比で200万トン増枠され、過去最高の600万トンとなった。乾期作の生産は全体で800万トン、このうち500万トンが担保融資制度による買上げとなり、政府の在庫量は700～800万トンに膨れ上がる見込みである（USDA, GAIN Report 09年6月30日）。

担保融資制度の肥大化が進行するなかで、これまでのコメの流通・輸出メカニズムに大きな変化が生じている。タイのコメ流通は市場取引をベースに、生産者・集荷業者・精米業者（ブローカー経由）輸出業者へ流れ、価格形成はこれと逆に輸出価格を起点に農家の庭先価格が決まる構造だった。この構造の中で、これまでは輸出業者は圧倒的な価格決定力を持ち、国内でフリーハンドに近い形でコメの調達が可能であった。

しかし、担保融資制度の拡大によって、生産者・精米業者・政府というルートが大きくなると、政府と精米業者の価格決定力が格段に強くなっている。精米業者はこの制度により買取資金が不要となり、一方で精米加工代、倉庫代が安定的に確保できる。さらに一部の業者は、農家からの買入時の籾含水率の過大算定、また担保の在庫米を期日前に精米し輸出市場に売却し、その後期日までに別途現物を手当てするという不正を繰り返しているという。また、こうした不正には政治家の関与が指摘されている。

他方、当然だが輸出業者は担保融資制度

について強く反発している。彼らはこの制度がタイの強みである市場の自由さを奪い、コメ価格を市場実勢以上に高止まらせ、対外競争力を低下させていると批判する。輸出業者は政策等により市場実勢を上回る価格で調達せざるをえず、しかも量確保のためには政府在庫の放出に依存しなければならなくなっている。

しかし、アピシット政権に入り260万トンの政府在庫入札が行われたが、政府は落札後に財政損失が巨額すぎるとの理由でキャンセルし、以後の入札は遅延している。輸出業者は輸出契約を遵守するためには、タイ全体としては過大な在庫があるにもかかわらず、市場から高値でコメを調達しなくてはならず、マージン縮小につながっている。

（4）農民の反応と制度改正に向けた動き

担保融資制度にはさまざまな弊害が明らかになっているが、主なものとしては政府の財政負担が大きい、不正の余地が多い、利用が大規模農家に偏っている、ことの3つが挙げられる。^{（注8）}このうち最後の点は、この制度が農民の収入改善を意図したのものにもかかわらず、現実には大多数の零細農家が受ける恩恵はごく限定的であるとの指摘である。

08年雨期作を対象とする担保融資制度の参加者数は、全国で57万戸に過ぎず（前掲第6表）、一戸当たり50万バーツの利用上限額の水準も相当高い。東北部、北部の農家では、そもそも販売余剰はごくわずかで

ある。また、零細農家は少量の精米業者に持ち込み、煩雑な手続きを踏んでBAACから融資を受けるよりは、買取金額が低くても近くの集荷業者や精米業者から直接現金をもらうことを選択する傾向がある。農家は業者から融資、肥料等の前渡しを受け、口頭で業者へのコメの販売を約束することも多い。

この制度の恩恵をもらっているのは、生産性の高い地域の大規模農家であろう。三期作ができる中央部スパンブリー県の農業事務所での聞き取りでは、「精米業者の買取価格が8,000～9,000バーツなので、現行の融資価格12,000バーツは農家にとりいい水準」「だいたい半分が農家の手取りとなるため農民は増産意欲が強い」、しかし「肥料、農薬、地代等が上昇しているので、10,000バーツ以下の価格では農家は苦しい」とみている。同県で60ライのコメ栽培をしているある農家は三期作で、単収はライ当たり約1トンと非常に高い(約6.3トン/ha)。また規模拡大にも積極的で、農家グループを作り200ライ程度の大規模稲作を計画中であった。

稲作農家協会での聞き取りでも「現行の12,000バーツは農家がなんとかやれるレベル。生産コスト7,000バーツ+所得で最低10,000バーツ必要」としている。他方、「この制度が市場メカニズムを歪曲している面もあり、100%支持している訳ではない」とする。融資価格の引下げには、「政府が安価な肥料や、地域に適したよい品種を提供し地域全体に普及させていくことが

重要」とみている。

アピシット政権は、市場価格を上回る担保価格による市場介入は今年度でやめ、今後は最低価格保証制度との併用を導入する方針を打ち出している。この制度は価格が一定水準を下回った場合、農家に生じる損失を保険でカバーするもので、保険料は国が部分負担するとしている。しかし、担保融資制度の変更や融資価格の引下げには農民の強い反発があり、また最低価格保証制度についても保証水準をどうするかという問題がある。政治の不透明な状況が続くなかで、コメの価格支持をめぐることは今後もさまざまな混乱が予想される。

(注8) 国内米価の上昇で周辺国からタイへのコメ流入が増加している。2010年からAFTAの自由貿易スキームによりコメへの関税がゼロとなるため、今後一層流入が増大し、品質が維持できなくなるとの懸念がある。

まとめ

変貌する市場構造と

「競争から協調」に向けた動き

昨年来、コメの国際市場は、90年代以降の「安価で安定的」にみえた構造が反転し、再び「薄くて、限界的で、変動の激しい」市場へと向かう兆しが生まれているようにみえる。世界2位、3位のコメ輸出国であるベトナム、インドが自国供給を優先するために輸出規制を実施し、また輸出規制を実施しなかったタイでも国内価格支持への対応などによって、輸出供給の柔軟性、弾力性が後退する事態が起きている。こうし

た主要輸出国における変化は、輸入国に「安価で安定的」な輸入システムは「幻想」であり、コメ自給の必要性を再認識させる契機になるのではないだろうか。^(注9)

コメの主要輸出国は、タイを除けば基本的に「国内の余剰米」を輸出しており、自国の需給次第で輸出規制を今後も行おう。かたや、輸入国も一部を除けば、主食であるコメは自給が原則で不足分のみを輸入する構造である。コメの国際市場に内在する根幹的な問題として、こうした不安定な需給によって形成される国際価格を起点に生産者価格が決定され、零細農がその条件に対応できる範囲で輸出供給力が形成される構造にある。

いわば農民の貧困が、コメ国際市場の成長の「土壌」であるという構造は、不安定で長期的に持続可能なものとはならないだろう。^(注10) タイ、ベトナムを追う形で、ミャンマーやカンボジア等が新興の輸出大国となることで、国際市場は再び成長の契機をつかむ可能性は長期的にはあり得ようが、その場合でも農民の貧困を土壌にした市場構造の「玉突き」に過ぎないだろう。

タイのような大輸出国においても、農民が変動の激しい国際価格に対応してコメ生産で生計を立てていくのは難しくなっている。しかも、農村には膨大な零細農民が生活しており、近い将来、非農業部門でのフォーマルな雇用を得る可能性も乏しい。タイは経済的には中進国化しながらも就業人口比で40%が農業に従事しており(07年)、^{きんてん}公的な支援が広く均霑していくには、農民

層が大き過ぎる現実がある。

こうしたなかで、農民の生活水準を長期的に引き上げるためには、時間がかかるだろうが、農協のような地域に根ざした協同組織の育成が不可欠だと思われる。しかし、タイの農民は、フロンティア農民に近い性格を持ち、地域共同体的な結びつきの基盤ができていく歴史的背景がある。政府支援にかかわらず、農民組織の存在はいまのところ極めて脆弱である。しかし、たとえ前途は困難であっても農民自らの手で、環境や地域社会と調和できる生産・販売組織を作り、暮らしをよくしていくしか道はないのではなからうか。こうした取組みをさまざまなレベルの協力を通じ支援していくことが、安定的なコメの国際市場の形成にもつながらう。

そのためには各国ごとの協力関係が必要なのと同時に、二国間、またアジア域内、さらには国際的な協調関係の構築が不可欠である。タイ、ベトナムの間には、コメに関して政府間、業界団体、農家のレベルでの協調に向けた協議が02年以降継続されている。協議の内容は、主に生産および生産技術情報の交換であるが、将来は協力関係を地理的に広げるとともに、農民が安心してコメ作りができる経済社会の構築が中心目標に位置づけられてくることを期待したい。

(注9) 短期的には、インドがいつ非バスマティ米に対する輸出禁止措置を解除するかが、国際市場の焦点である。インドの輸出再開は、主要輸出国間に新たな軋轢をもたらす契機となる可能性が高い。

(注10) 輸出の持続性について環境、生態面からの制約も非常に強まっている。例えば、ADB報告書「The Economics of Climate Change in Southeast Asia: A Regional Review」(April 2009)は、東南アジアは気候変動の影響を受けやすい地域であり、地球温暖化に伴う気温上昇、降雨量の減少、海面上昇等々の影響から、コメの収量が1990年時点に比べ2100年までに50%減少するおそれがあると予測している。

東南アジアのなかでは、ベトナム・メコンデルタはほぼ全域が海拔標高0～2.0mの平坦地であるだけに、わずかな海面上昇でも内陸深奥部まで海水が浸透し農業生産に大きな被害を与える危険があるとみられる。

<参考文献>

- ・伊東正一(2007)「ベトナムのコメ経済及びコメ輸出メカニズム」
<http://worldfood.apionet.or.jp/simpo/07MarchPapers/9.pdf> 09年6月アクセス
- ・大内力・佐伯尚美編(1995)『揺れ動く世界の米需給』家の光協会
- ・岡江恭史(2007)「WTO 加入へと至るベトナム農政の展開と農林水産業の概況」『FTA・WTO体制下のアジアの農業、食品産業と貿易』
<http://www.maff.go.jp/primaff/koho/seika/project/pdf/kousyo4-6.pdf> 09年5月アクセス
- ・小澤健二・手塚真・立岩寿一・菅沼圭輔(2002)「1990年代後半以降のタイの米輸出動向 - 輸出競争力を支える諸条件、米の国際市場動向などに関連させて - 」『先物取引研究』第7巻第1号No.11, 日本商品先物振興協会
- ・小澤健二(2004a)『コメの国際市場』, 新潟日報事業社
- ・小澤健二(2004b)「1990年代後半以降のベトナムの米輸出動向とその特質 米の国際市場構造, 米の先物取引の可能性などに関連させて」『先物取引研究』第9巻第1号No.13, 日本商品先物振興協会
- ・坂田正三(2003)「ベトナムのコメ流通 流通構造からみたドイモイの再評価」高根務編『アフリカとアジアの農産物流通』, アジア経済研究所
- ・ジェットロ(2008)『タイの農業政策, 農業の現状と周辺国を巡る動き』
- ・室屋有宏(1996)「タイの食料輸出の担い手構造 アグリビジネスの行動と日本の役割を中心に」『農林金融』9月号
- ・室屋有宏(2004)「タイ東北部における農民のリスク分散行動 コンケン市近郊2農村の事例」『調査と情報』9月号
- ・Concepción Calpe(2004)“International Trade in Rice, Recent Developments and Prospects”
http://www.fao.org/es/esc/common/ecg/79/en/Japan_04_paper_last.pdf 09年5月アクセス
- ・Institute of Policy and Strategy for Agriculture and Rural Development, MARD(2009) *Vietnam Rice Sector 2008 and Outlook for 2009*
- ・OMIC(2008) OMIC Report 2007, Rice Situation in Thailand

(むろや ありひろ)

